



Patent Search Grand Prix

特許検索競技大会

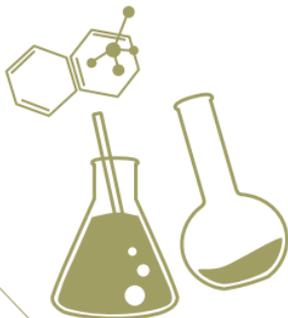
Patent Search Grand Prix

Mechanical
Field



Electrical
Field

Chemical and
Pharmaceutical
Field



特別誌

2023大会
最優秀賞受賞者
三分野ゴールド制覇賞受賞者
ゴールド認定者 から、
次なる挑戦者へのメッセージ！

本誌発行にあたって

特許検索競技大会は、工業所有権協力センター(IPCC)が主催となり、成績優秀者に対してレベル認定(ゴールド、シルバー、ブロンズ)を行うようになってから10周年を迎えました。その間、新型コロナウイルス感染症の影響で開催中止を余儀なくされたり、またレベル認定が行えない年もありましたが、2022年度からはレベル認定を再開、また2023年度からは会場開催も復活しました。ファーストステップコース(旧称スチューデントコース)も含めた参加者は年々数を増やしており、2023年度は、アドバンストコース269名、ファーストステップコース576名の参加がありました。

アドバンストコースのレベル認定には毎年多くの方がチャレンジされますが、特にゴールド認定を受けるのはかなりの狭き門で、2023年度は3名のみの認定となりました。しかし、その中には2022年度に引き続いて、全分野(電気、機械、化学・医薬の三分野)でゴールド認定を受けた三分野ゴールド認定制覇者も生まれています。

この3名の方々にお集まりいただき、特許検索競技大会への意気込みや日頃のスキルアップに向けた取り組みなどについてお話を伺いました。示唆に富むお話を伺うことができましたので、日頃特許検索業務に当たられている方々、また今後本大会でゴールド認定を目指される方々のご参考に供するため、その内容を本冊子にまとめました。是非ご一読いただき、ますます多くの方々に本大会にチャレンジしていただけることを願っております。

2024年6月

特許検索競技大会実行委員会

委員長 金澤 祐孝

【株式会社IHI 技術開発本部 知的財産部】

特許検索競技大会

日本で唯一、特許調査の実務能力を評価する大会

大会には、学生や企業の研究者等、知財業務初心者向け問題のファーストステップコース(旧称スチューデントコース)と、特許調査に必要な知識・技能を有し、特許調査業務等を実施しているプロ向け問題のアドバンストコースの、レベルが異なる2コースがあります。

成績(採点結果)が一定のレベルをクリアした方には、認定証を交付します。

学生・研究者等初心者向け
ファーストステップコース
(旧称スチューデントコース)
● 認定

上級者向け
アドバンストコース
3レベル

- ゴールド認定
- シルバー認定
- ブロンズ認定



大会風景



特許検索競技大会2023 ゴールド認定者



大久保 真己 Maki Okubo

秋山国際特許商標事務所

➤ 機械分野

登録調査機関で8年ほど調査業務に携わったが、現在は弁理士業務がメインで、明細書を書いたり、中間処理の対応をしたりしている。大学で学んだ専門性にはこだわらずに、あえて広い技術分野に関わってきたことが自分の強み。

掲載順序は50音順



静野 健一 Kenichi Shizuno

アズテック株式会社

➤ 化学・医薬分野

現在、文献調査、後輩の指導教育、社内ツールの開発を担当。弁理士でもあり、客先からの依頼があれば、どのような技術分野でも対応する。今までに機械分野と電気分野でゴールド認定を受けているが、化学・医薬分野は苦手かと思われていた節があったので今回頑張ってチャレンジした。



田辺 剛 Tsuyoshi Tanabe

富士フィルム

知財情報リサーチ株式会社

➤ 機械分野

もともとは親会社の開発部門にいたが、今の会社に移り、先行文献調査、無効資料調査等を担当。これらの調査では、本大会でのゴールド認定者や初の三分野ゴールド認定制覇者の上司・先輩方から直接指導を受けていることが役立っている。



2023ゴールド認定者との懇談会

2023大会最優秀賞の田辺剛氏、三分野ゴールド制覇賞の静野健一氏、ゴールド認定者の大久保真己氏をお迎えして、大会実行委員長の金澤祐孝氏、IPC顧問の櫻井孝が、特許サーチャーとしてスキルをどのようにして磨いてきたか、特許検索競技大会をどのように活用してきたのかなどを、じっくり伺いました。

大会に向けた取り組み

櫻井：大会に向けて取り組まれてきたことはありますか？

田辺：日頃の業務の中で検索式を立てるとき、多面的な要素を取り入れるよう工夫しています。楽をせず、いろいろな要素を加味しながら試行錯誤を行うことでスキルアップに努めています。また、スクリーニングする際に公報を早く読む練習も積んでいます。

静野：日頃の業務の中で、同僚の行った調査内容を確認すると、先輩の教育指導も行っているの、そういうことを通じて自身もスキルアップしてきていると思います。

大久保：今年はたまたま8月末に業務のピークがあり忙しかつたのですが、気力で大会に臨んだのが奏功したように思います（笑）。また、客先から特許調査についての講義依頼があり、その資料をまとめるときに特許検索について自分の頭を整理できたのも良かったと思っています。

櫻井：大会に向けて先輩からのアドバイスや勤務先からの後押しのようなものはありましたか？

田辺：日頃の業務の中で、2014年にゴールド認定を受けた上司から検索式の指導を受ける機会が多かったです。また、無効資料調査では、昨年三分野ゴールド認定制覇を果たした先輩から指導を受けました。そういう指導の中でよく本大会の話が出てきて、大会ではこういうやり方をすると、大会ではこれが必ず問われるという話をよく聞かされました。そうやって普段の業務の中で本大会について意識付けがなされてきたように思います。社内で意識付けを広めていくのが良いと思います。また、特許検索者として特別な肩書（エグゼクティブ）ももらえますし、グループ会社も含めて社内で周知してくれるのも後押しになっています。



（左から大久保氏、田辺氏、静野氏）

静野：弊社でもゴールド認定を取ると、社内で周知してもらえる機会があるので、それがモチベーションにもなっています。会社の忘年会でも表彰され、みんなで盛り上がりました（笑）。また客先に実力を認められることも嬉しいです。自身の経験を生かして先輩にも大会参加を勧めています。

大久保：以前勤めていた登録調査機関では、会社をあげて本大会への参加を推奨していました。会社からは、大会の勉強法や時間配分など、大会に臨むにあたってのいろいろな情報をアドバイスしていただきました。今の事務所でも、認定が取れると社内で周知してくれるので、モチベーションになっています。

櫻井：皆さんのご所属先はこれまで多くのゴールド認定者を輩出していますが、そういう会社がさらに実力者を増やしているの分かりました。会社挙げての取り組みが重要そうですね。

解答の見直しは必須

櫻井：今年の試験問題はどうでしたか？

田辺：自分は今年初めて大会に参加しました。過去問集は見えていますが、実際に4時間という制限を付けた状況下で問題を解いたわけではないので、比較はできません。

櫻井：初参加でいきなり最優秀賞ですか？！何が勝因でした？

田辺：実際に参加してみて4時間という時間制限は厳しいものと感じました。3時間20分くらいで一通り解答できたので、あとは時間の許す限り解答を見直しました。すると、問題の条件を一部見落として解いていたものや、手元に書き留めておいた答えと違うものを解答欄に記入していたところなど、普段あり得ないようなミスをしていて驚きました。おそらく大会という特別な雰囲気の中で焦りとか動揺があったのだらうと思います。見直しによって点数を回収できたのが良かったと思います。



静野：私は過去に参加したときと比べて今回の問題が特に難しいとは思いませんでした。自分としては力を出し切った感はありませんが、ゴール認定は偏差値で判定されるので、必ずしも自分の感覚とは合わないのかもしれない。

大久保：私は今年の問題は取り組みやすかったと思います。ただ、周囲の受験者からも「今年はよくできた気がする」という声が続聞聞こえてきたので、多くの人が高得点で偏差値が出にくかったのではないのでしょうか。

金澤委員長：採点結果を見ると、今年は素の平均点が高かったです。そうすると高い偏差値が出にくかったのではないかと思います。

検索戦略は日頃行っていることの再確認

櫻井：最優秀賞と聞いてどう思われましたか？

田辺：とても驚きました。初めての挑戦でいきなり最優秀賞が取れるとは想像もしていませんでした。

櫻井：最優秀賞を取るのに、何が良かったのでしょうか？

田辺：過去問集を見ていて、これは苦手だと思ったのは、問2の1000字で検索戦略を書くところです。最初は、戦略なんてどう書けばいいんだろう、良い文献が見つければそんなこと関係ないじゃないかとも思いましたが、過去問集を見て、1000字の部分を写経のように書き写してみました。それによって、要するに日頃暗黙のうちにやってきたことを文章化すればいいんだと気が付きました。そうやってネックと思われた問2を克服できたことが良かったと思います。

櫻井：三分野制覇を達成しての感想はいかがですか？ 広い技術分野の知識を習得するのは難しいのではないですか？

静野：三分野制覇については前から意識していました。田辺さんが指摘された問2の1000字のところは、日頃から後輩にも教育しているポイントです。それは技術分野が異なっても同じです。広い技術分野に取り組みやすくなるため、特許分類とか、技術用語の同義語とかを、日々の業務の中で身に付けています。どんな技術を担当するにしても共通点は特許分類に対する理解をしっかりと持つことだと思います。

櫻井：今後、他の分野にもチャレンジされますか？

大久保：前から機械分野を主に担当してきていたので今回は機械分野で挑戦しましたが、最近は弁理士として化学分野・電気分野も担当することが多くなりました。新しい技術分野を担当するときは、技術用語などを調べながら理解していきますが、特許検索の基本を押さえればどのような技術分野でも対応できると思うので、是非別の分野でもチャレンジしたいと思います。

田辺：最優秀賞を取ってしまった以上、来年もチャレンジします。他の技術分野で参加すると思いますが、今年のようにはいかないかもしれません。

日常業務内での情報収集が大切

櫻井：過去問集やセミナー資料についてはどう思われますか。

大久保：私は過去問集で問題の傾向をつかむようにしましたが、過去問自体はあまり解かずに大会に臨みました。

金澤：特に問1は知識を問う問題なので、過去問集は有意義ではありませんか？

田辺：問1についてはその場でネットを使って調べてくれることが許されているので、過去問にはあまり頼っていません。ただ、問1を見ることによってこの程度のことは知っておかないといけないんだという意識付けにはなると思います。過去問集を眺めていると、その時々にはホットな話題を問題に取り入れていて、問題作成側の尽力に感謝したいです。





静野：自分の経験から問1に関していえば、時間をかけずに問1を解くことがこの大会で良い成績を上げるポイントだと思います。その場でネットを使って調べられるとはいえ、ある程度の知識を持ち合わせている方が他の問題に時間を割くことができ、良い結果が得られます。そのためには、日頃から社内で行う同僚との情報共有がとても大切です。

A | 検索に対する優位性はある！

櫻井：新しい検索ツールが出てきていますが、使っていますか？

田辺：広い対象文献の集合から関係の薄いものを振るい落とすような作業で使っています。自然語入力して関連性の大きいものから順に並べるようなことを行っていますが、求めているものが上位に出てくることが結構あります。人の行う作業の補助ツールとしては有効だと思います。

静野：ルールベースのAIは10年くらい前から補助ツールとして使っており、機械学習によるものは、数年前から業務に併用しています。生成AIについては、どう業務に組み込むか、一部使い始めているところです。

大久保：事務所としては積極的に取り入れていきたいという考えですが、実務的にどう用いるのかはまだこれから詰めていくところです。応用できるところはたくさんあると思い、積極的に情報収集しています。



田辺：一般論として、教師データがある業務にはどんどんAIが入ってくると思います。しかし、最先端技術についてはそもそも教師データがありません。特許分類すらありません。そういうところはAIで何か探させようとしても難しいのではないのでしょうか。最先端技術について人間は初見でも理解ができますから、まだまだ人間の能力を生かせるところはあると思います。ただ、検索業務に携わる人間も進化していかなければいけないでしょう。

静野：AIに任せる業務をどう定義するのですが、大量の文献の中から絞り込む作業と定義すれば、これは相当な部分を機械に置き換えることができます。でも、機械にやらせる作業の目的を考えるのは人間です。そして、機械の出した結果がその目的に沿っているかどうかを判断するのもやはり人間の仕事として残るはずで、現在は人間が明細書を読み、発明内容を抽象化して特許分類を付与し、その特許分類を使って文献検索を行っているわけですが、AIはその一連の流れを直接できるのではないのでしょうか。そのあたりにAIを生かせる道があるように思います。

大久保：単純に似たような特許公報を見つけ出すのは機械でも十分できます。しかし、特に無効資料調査において、無効の論理構成を構築し、それを基にサーチするのは機械のみではまだ難しいと思います。AIが人間に追いついてくるのはまだ先だと思いますが、AIもどんどん進化しています。単純な検索作業はAIに代替させることができるので、AIを上手に使いつつ、人間の仕事に付加価値を付けていきたいと思っています。

櫻井：本大会開催の意義はこれからも十分にあり、続けていく意義を改めて確認できました。

検索では柔軟な姿勢が重要

櫻井：特許検索の極意は何でしょう？

大久保：特に侵害調査や無効資料調査においては、検索の目的をはっきりさせることです。陥りやすい誤解ですが、調査は文献を探すこと自体が目的ではありません。目的に合わせて、探すべき文献を柔軟に検討することが大切です。

静野：最初[Y1+Y2]という仮説を立ててY1を探しに行っても、文献に当たっていきうちにどうもY1はなさそうだと気が付いたら、元の仮説にこだわらずに[Y3+Y4]と切り替えてY3を探しに行くというような姿勢が大切です。行きつ戻りつができるようになる、そういう柔軟な姿勢が重要です。



田辺：私はもともと開発部にいましたが、途中から特許担当になり、ずっと広い技術分野を担当することになりました。その際、どんな技術でも興味をもって取り組むように心がけました。業務の中で行う特許検索は短期間で結果を出さねばならず、得手不得手は人それぞれあるでしょうが、日頃の業務の中で克服していけると思います。

櫻井：アンテナを広く張ること、また検索に際しては一つの考えに拘泥せず柔軟に取り組めるようにすることが重要と分かりました。

本大会をもっと盛況に！

櫻井：大会運営側へのご注文はありますか？

静野：良い問題を作ってくれてありがとうございます。ただ、アドバンスコースの参加者が一時期より減ってしまっていることが残念です。大会がもっと盛況になるといいなと思います。

大久保：非常に良い大会だと思いますので、本大会のことが世の中で広く知られるようになると思います。そもそも特許検索の仕事というものがあること自体知らない人が多いのは残念です。もっと大会を宣伝していただいて、特許業界を盛り上げてほしいと思います。

櫻井：ファーストステップコース（旧称スチューデントコース）は特許検索業界の裾野を広げる意味でも力を入れています。どう思われますか。

静野：良い取り組みだと思います。特に理系の学生にしてみれば、社会に出たときに特許検索を知っていると役に立ちます。就職にも有利だと思います。



櫻井：今年は久しぶりに会場開催を復活させましたが、いかがでしたか？

田辺：私は会場開催の方が集中できるのでありがたいです。リモートだとネット接続がうまくいかどうか気がになりますし、トラブル発生時の対応も心配です。是非会場開催を続けてほしいと思います。

大久保：私も会場参加しました。リモートでは通信状況が心配ですが、会場参加の方が安心できます。

静野：私の会社では複数名が参加しましたが、会場とリモートとで半々でした。私としては、リモートで普段の業務と同じ環境で参加する方がやりやすいと感じます。

今後レベル認定に臨まれる方へのメッセージ

田辺：本大会は特許検索に関する総合的な力を試すのにとても良い機会です。特に問2は自身の検索プロセスの確認ができるので、ある程度特許検索に慣れている人にも自己点検の意味で勧めたいと思います。継続的に参加していくことが大切だと思います。

静野：今は日本経済全体が大変なときです。そういうときにこそ、何でも正しい情報というものが重要になります。この大会は、特許に関する正しい情報を得るための確立した手法を見つけられる重要な機会です。戦略的に正しい方法論を学ぶことができます。是非多くの人にチャレンジしていただきたいと思います。

大久保：本大会は、特許検索の基本に立ち返れるところが良く、素晴らしい大会だと思います。日頃業務で特許検索に取り組んでいても、自分の癖のようなものが身についてしまっていたり、考え方が凝り固まってしまうことがあります。そういう中で、この大会は検索の基本を思い出させてくれます。たまの腕試しもしよ、長年継続して参加するのによし、是非多くの方に参加していただきたいと思います。

櫻井：大会運営側としても今後より多くの方々にご参加していただければ、取り組んでいきたいです。本日は有意義なお話ありがとうございました。